

オスマン朝時代におけるアラビア語稿本の受容  
—— トルコ・イスラム美術博物館所蔵『真珠の首飾り』  
稿本群の分析から ——

Circulation of Arabic Manuscripts in the Ottoman Period :  
A Survey of the Manuscripts of *Iqd al-jumān* Preserved  
in the Türk ve İslam Eserleri Müzesi

中 町 信 孝  
Nobutaka NAKAMACHI

**Abstract** This study examines how manuscripts of Arabic historical works written in the Mamluk period were transmitted, accepted, and circulated in the Ottoman period. It focuses on the manuscripts of *Iqd al-jumān fi tāriḫ ahl al-zamān*, by Badr al-dīn al-'Aynī (1361-1451).

During the Mamluk period, several versions of *Iqd al-jumān* were copied directly from the holograph manuscripts. Most of these manuscripts, including holographs, were transported to the Ottoman palace libraries following Selim I's conquest of Egypt. From the end of the seventeenth century, *Iqd al-jumān* began attracting courtiers' attention, and additional copies of the manuscript, together with its translations into Ottoman Turkish, were made available. In the era of Ahmet III (1703-30), Grand Vizier Nevşehirli Damad İbrahim Paşa is known to have organized a translation project for this chronicle.

The eight volumes of manuscripts preserved in the Türk ve İslam Eserleri Müzesi (TIEM) depict the treatment of the manuscripts of *Iqd al-jumān* during this translation project. According to a colophon attached to the TIEM manuscripts, these manuscripts had been originally preserved in the Selimiye library established by Selim II in Edirne. They were then transported to Istanbul for utilization in the translation project. Although the Selimiye collection has been disseminated among several libraries in Istanbul, it can be restored by identifying the tughra of Selim II on the front page of each manuscript.

A close examination demonstrates that the Ottoman versions of *Iqd al-jumān* may have been copied from the Selimiye collection in Edirne even before the commencement of the translation project. Conversely, most of the holograph manuscripts of *Iqd al-jumān* had been preserved in Ahmet III's library in the Topkapı Palace and, as a result, might have been unknown to contemporary translators.

**Keywords** Arabic historiography (アラビア語文献学), the Mamluk Sultanate (マムルーク朝), the Ottoman Empire (オスマン朝), Ahmet III (アフメト3世), Badr al-dīn al-'Aynī (アイニー)

## はじめに

マムルーク朝時代（1250-1517年）、カイロやダマスカスなどの大都市においてはアラビア語での文筆活動が盛んに行われ、多くの書物が執筆・書写された。しかし1516年、1517年に行われたセリム1世（在位1512-20年）による征服活動の結果、これらの地域はオスマン朝の支配下に置かれることとなった。セリム1世は征服地から多くの文物を接収し、それらをオスマン朝の首都イスタンブルに持ち去ったことで知られるが、アラビア語稿本についても、カイロ、ダマスカスなどから多くが持ち去られたと考えられる。

一方、オスマン朝には愛書家として知られる君主が数多くいた。中でも有名なのは、大宰相ネヴシェヒルリ・ダーマード・イブラヒム・パシャ Nevşehirli Damad İbrahim Paşa とともに「チューリップ時代」とも呼ばれる文化爛熟期を現出したアフメト3世（在位1703-30年）である。彼は書籍蒐集に並々ならぬ関心を示し、宮廷内に彼の名を冠した図書館を建設した。また彼は、アラビア語やペルシア語の名高い書物を集め、オスマン・トルコ語への翻訳事業を遂行したことで知られる [林2008:281; 小笠原2018:200-202]。また近年ではネジプオールらの研究が、バヤジト2世（在位1481-1512年）の蒐集した稿本についての網羅的な調査を行った。彼らの研究が明らかにしたのは、バヤジトが父であるメフメト2世のイスタンブル征服時に獲得された書物を受け継ぎ、さらに自ら新たに入手した書物を加えた一大コレクションを有していたという事実である [Necipoglu et al. 2019]。

アラビア語歴史文献学の立場からすれば、オスマン朝下での稿本伝来や書写のプロセスを明らかにする作業は、それぞれの作品、あるいは稿本の史的価値を確定するためには欠かせない。しかし上記のような研究は端緒についたばかりであり、オスマン朝においてアラビア語の稿本がどのようにして集められ、宮廷人士の間でどのように受容されたのかについては、依然として具体的な情報に乏しい。

そこで本稿では、年代記『世人の歴史における真珠の首飾り（*Iqd al-jumān fī tārikh ahl al-zamān*）』（以下、『真珠』と略す）をとりあげ、この作品の稿本がどのようにしてオスマン朝に伝わり、受容され、流布したかを検討する。『真珠』はマムルーク朝後期に活躍した歴史家バドルッディーン・アイニー Badr al-din al-'Aynī (1361-1451年) によって執筆された大部の年代記であり、マムルーク朝末期においては何人かの書写者によって数多くの稿本が作られた。自筆本を含むこれらの『真珠』稿本は、現在その多くがイスタンブル等のトルコ共和国内の蔵書機関に収蔵されている。中でも、トルコ・イスラム美術博物館 (Türk ve İslam Eserleri Müzesi, 以下 TIEM と略す) が所蔵する8冊の稿本は、従来の研究では十分には利用されてこなかったが、『真珠』稿本群の来歴を示す多くの手がかりを含んでいる。『真珠』の各稿本がどのようなプロセスを経てオスマン朝宮廷にもたらされたかを明らかにすることは、高い史的価値を有する『真珠』の歴史文献学的研究に資するだけでなく、

オスマン朝社会においてアラビア語文献がどのように受容されていったかを考える手がかりともなるだろう。

## I 『真珠』 稿本の全体像

### 1 マムルーク朝期稿本

現存する『真珠』稿本は、マムルーク朝期に作られたものと、オスマン朝期に作られたものとに大別できる。ここではまず、マムルーク朝期に作られた稿本を、(1) 自筆本、(2) イフミーミー書写本、(3) 2分冊稿本に分け、それぞれの基本的な情報を整理する<sup>1)</sup>。

#### (1) 自筆本

アイニーは『真珠』全体を全19巻からなるものとして執筆したが、そのうち自筆本が残るのは14冊分である。これらの稿本は、筆跡や、大きさ、1ページあたりの行数など外見的特徴を共有するほか、すべてのタイトルページに、アイニーが建立したバドリヤー学院(al-Madrasah al-Badriyyah)へのワクフとして設定する旨を記す書き込みがある。執筆時期は1422年から1438年であり、第19巻の後半部のみは著者の晩年に書き足されている。現在これらはいずれもイスタンブルにあるトプカプ宮殿図書館(Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi)、バヤジト国立図書館(Beyazıt Devlet Kütüphanesi)、スレイマニエ図書館(Süleymaniye Kütüphanesi)に分かれて所蔵されているものの、元々これらの自筆本は同じ時期に作られ、同一箇所に保存されていた、一揃いの稿本群を形成していたと考えられる<sup>2)</sup>。

#### (2) イフミーミー書写本

バヤジト国立図書館のVeliiyüddinコレクションに収められた『真珠』稿本のうち、4冊には、イフミーミー Muḥammad b. Aḥmad b. Muḥammad al-Anṣārī al-Ikḥmīmī なる人物が著者アイニーの自筆本から直接書写したとの記述がある。これら4冊の他にも、末尾が欠損しているもう1冊は、筆跡や、行数等の外見的特徴が酷似しており、同じ人物の書写であることは間違いない。同時代の人名録によるとイフミーミーとは、アイニーに教えを受けたウラマーの1人である。これらの稿本に加え、トプカプ宮殿図書館所蔵の1冊と、後で詳しく述べるTIEM所蔵の1冊もまた、イフミーミーとの書写者名を持ち、その筆跡、行数やサイズなどの外見的特徴も共通しているため、イフミーミー書写本群の一部をなすものと見なしうる。イフミーミー書写本の書写時期は1487年から1492年にかけてであり、自筆本に次

1) マムルーク朝期稿本については中町2004:138-143でその概観を示している。

2) 中町2006:42-44参照。なお、同稿表1で示した自筆稿本それぞれの摺筆年月日は、Nakamachi 2021:130, Table 1に完全な形で提示してあるのでそれを参照のこと。

【表1】 イフミーミー書写本

巻	所蔵番号	収載内容 (AH)	葉数/行数/サイズ	書写年月日
1	Veliyyüddin 2374	前書き-	395/23/270×185	892.07.11/1487.07.03
4	Ahmet 2911/C4	11-23	309/23 <sup>*1</sup> /270×185	893.09.26/1488.09.03
8	Veliyyüddin 2384	151-203	210/24/262×185	
12	Veliyyüddin 2389	521-578	327/23/275×180	898.02.27/1492.12.18 <sup>*2</sup>
14	Veliyyüddin 2391	621-688	363/23/275×180	895.05.07/1490.03.29 <sup>*3</sup>
16	TIEM 2157	708-724	273/23/268×176	893.12.16/1488.11.21
19	Veliyyüddin 2396	799-849	387/23/270×180	893.06.19/1488.05.31

\*<sup>1</sup> Karatay 1966: 397 では行数を 19 行としているが、実見したところ 23 行ないし 24 行であった。

\*<sup>2</sup> *Iqd/Rizq*: 1/329.

\*<sup>3</sup> *Iqd/Amin*: 2/394.

いで重要な史料的价值を有する稿本群である。詳しい情報は【表1】のとおりである<sup>3)</sup>。

### (3) 2分冊稿本

Veliyyüddin に収蔵されている『真珠』稿本のうち、2点は自筆本、5点はイフミーミー書写本である。Veliyyüddin 稿本群のマイクロフィルムを所蔵するエジプトの国立図書館 (Dār al-Kutub) は独自のカタログを作りこれらの稿本の情報を記しているが、それによると残る 15 点の書写者はアズハリー ‘Abd Allāh b. ‘Īsā b. Ismā‘il al-Azharī という人物であるという [Dār al-Kutub 1930: 267-269]。アズハリーについては、同時代史料には一切の情報が残されていないが、Veliyyüddin 2386, 2394 の 2 稿本の末尾に書写者としての彼の名前と書写年月日が記されている。筆者はかつて、このカタログの記述に従いつつ、これら 15 点のうち明らかに外見的特徴や収載内容の異なる 5 点を除く 10 点を、アズハリー書写本としていた [中町 2004: 140-142]。

しかし、今回再検討したところ、これらの稿本はそれぞれ行数やサイズなどで共通点があるものの、丁寧なナスフ体で書かれたその筆跡は個人の特定が難しく、必ずしも単一の人物の筆跡とは言えないと考えるにいたった。さらに前稿では、スレイマニエ図書館が所蔵する Süleymaniye 831-835 の 5 稿本もまたアズハリー書写本として分類していたが、やはりこれらも筆跡の違いから、必ずしもアズハリーによる書写本とは言えないと考えている [Eş 2010: 2, 494-498]。

ただしこれらの稿本は筆跡の違いにかかわらず、その内容において共通点があるため、一つのまとまった稿本群と見なしうるとの見解は変わらない。その共通点とは、これらの稿本の 2 冊分の内容が、自筆本やイフミーミー稿本の 1 冊分に相当しているという点である。すなわち、自筆本やイフミーミー稿本が全 19 巻で構成されているのに対して、これらの稿本

3) 中町 2004: 139-140。なお、同稿表 2 ではいくつかの情報が不完全なままであったが、その後の史料調査で補い、本稿【表1】で完全な形で示した。

【表2】 2分冊稿本

巻	所蔵番号	収載内容 (AH)	葉数/行数/サイズ	書写年月日
1	Ahmet 2911/C1	前書き-	251/19/270×180	
3	Veliyyüddin 2375		383/19/270×180	
4	TIEM 2155		242/19/270×180	881.09.05/1476.12.22
5	Ahmet 2911/C3	-4	309/19/270×180	
6	TIEM 2156	5-10	333/19/268×180	
7	Veliyyüddin 2378	11-16	297/19/265×182	
8	Veliyyüddin 2379	16-23	291/19/265×180	
9	Veliyyüddin 2380	24-38	290/19/265×180	
10	Veliyyüddin 2381	39-60	260/19/275×180	
11	Süleymaniye 831	61-73	304/19/270×185	
12	Süleymaniye 832	74-95	265/19/270×185	
13	Ahmet 2911/C13	96-126	264/19/270×180	
14	Veliyyüddin 2383	126-150	286/19/275×180	
15	Süleymaniye 833	151-192	227/19/270×185	
16	Ahmet 2911/C16	193-226	245/19/270×180	
17	Veliyyüddin 2385	226-279	268/19/270×180	
18	Veliyyüddin 2386	279-330	254/19/275×182	890.12.6/1485.12.14
19	TIEM 2158	331-386	283/19/268×180	
20	Süleymaniye 834	386-430	272/19/270×185	
21	Ahmet 2911/C21	431-481	272/19/270×180	
22	TIEM 2159	481-521	314/19/272×188	
25	TIEM 2160	579-591	218/19/268×180	
26	TIEM 2161	591-621	420/19/270×180	
31	Veliyyüddin 2393	708-712	234/19/275×185	
32	Veliyyüddin 2394	713-724	243/19/275×180	
33	Süleymaniye 835	725-735	256/19/275×180	891.02.24/1486.03.01
34	Ahmet 2911/C34	736-746	273/19/270×180	
37	TIEM 2162	799-813	303/19/270×180	

は全 38 巻で構成されているのである。そこで本稿では、これらの稿本を「2分冊稿本」群と呼ぶこととする。なお、後述する TIEM にも「2分冊稿本」に当てはまるものがあるため、【表2】では TIEM 稿本の情報も一覧に含めた。

## 2 オスマン朝における『真珠』への関心——翻訳と書写

これらマムルーク朝期に製作された『真珠』の諸稿本は、管見の限り、現在ではすべてトルコ国内、イスタンブールの図書館に所蔵されている。カイロに置かれていたであろうこれらの稿本が、いつどのようにしてイスタンブールにたどり着いたか、具体的なことは明らかでない。しかし、『真珠』という作品がオスマン朝の宮廷においてしばしば関心が払われていたことは、以下の事実からうかがえる。

美術史家のアルタンによれば、1693-94年に『真珠』のオスマン語訳の稿本が作られたという。それは、「黄道12宮」などの星座を描いたものであり、女性の裸体図像を含む、豪華

な彩色本であった [Artan 2006: 429; Rogers 1986: 256]。ただし、こうした彩色本はもっぱら美術的な観点から珍重されたと考えられ、『真珠』の中でも冒頭の地誌や天文誌の部分のみをカバーしているにすぎなかった。この当時において、『真珠』の歴史的叙述全体をカバーする翻訳が作られたかどうかは定かではない。

オスマン朝期における『真珠』の翻訳として最も有名なのは、前述した、アフメト3世治下で行われた翻訳事業である。この時代、数多くのアラビア語文献およびペルシア語文献がオスマン語に翻訳されたことが知られているが、『真珠』もその中の一つであった。バービンガーの研究によれば、1725年、アフメト3世の大宰相ネヴシェヒルリ・ダーマード・イブラヒム・パシャは多くの知識人を集めて、アラビア語の歴史書である『真珠』と、ペルシア語の歴史書である『Ḥabīb al-siyar』の翻訳を行うよう命じたという [Babinger 1927: 259-262]。なお、両史書の翻訳事業については、自らも翻訳者として関わったキュチュクチェレビザーデ Küçükçelebizade の歴史書にも同様のことが述べられている<sup>4)</sup>。

しかし、こうした書誌学的研究は『真珠』の翻訳書に関連する情報を記したものであり、『真珠』のアラビア語原典について詳しく述べられてはいない。これらの翻訳事業の際には、いったいどのような『真珠』原典が参照されたのであろうか。

### 3 オスマン朝期稿本

現存する『真珠』稿本の中には、オスマン朝時代に書写されたものも数多く残っている。その中でも以下に挙げる稿本群は、いずれも4巻で一揃いのシリーズを構成しており、1巻あたりの葉数がそれぞれ500を超える大部の稿本であるという共通点を持つ。それぞれの葉数、大きさ等は【表3】のとおりである。

#### (1) Gülnüş Valide Sultan 61-64 (スレイマニエ図書館蔵)

ギュルヌシュ・スルタン (1715年没) とはメフメト4世 (在位1648-1687年) の后であり、その息子であるムスタファ2世 (在位1695-1703年) およびアフメト3世の治世にもヴァーリデ・スルタン (母后) として高い地位にあった人物である [İpşirli 1996]。彼女の名が冠されたこのコレクションは、現在スレイマニエ図書館に収められており、そのうちのno. 61~64の4冊が『真珠』稿本である。それぞれの稿本はいずれも600葉から900葉に及ぶ大部のものであり、その内容はさらに細かい小区分に分かれている。複数の手によって書写されたとみられるが、書写者にかんする具体的情報は残っていない。書写年については、no. 63稿本の中に「1113年ズルカアダ月 (1702年4月)」という記述があり、おおよそその前後に書写されたと考えられる [Gülnüş 64: fol. 94a]。

4) Küçükçelebizade: 358-360; 小笠原2004: 139。なお、同史書における『真珠』翻訳事業に関する情報は、小笠原氏よりアドバイスを受けた。ここに記して謝意を表したい。

【表3】 オスマン朝期稿本

所蔵番号	収載内容 (AH)	葉数	書写年月日
Gülnüş Valide Sultan 61	前書き-16	625	
Gülnüş Valide Sultan 62	16-330	809	
Gülnüş Valide Sultan 63	331-620	688	1113.11/1702.04
Gülnüş Valide Sultan 64	621-850	630	
Beşir Ağa 454	前書き-16	704	
Beşir Ağa 455	16-330	872	1129.01/1716.12
Beşir Ağa 456	331-620		1130.03/1718.02
Beşir Ağa 457	621-850	756	
Carullah 1588	前書き-23	740	
Carullah 1589	24-330	673	1132/1719-1720
Carullah 1590	331-620	755	
Carullah 1591	621-850	849	1132.10.11/1720.08.16
Ahmet 2912/1	前書き-22 (AH)	564	
Ahmet 2912/2	23-334	608	
Ahmet 2912/3	335-623	530	
Ahmet 2912/4	624-850	581	

### (2) Beşir Ağa 454-457 (スレイマニエ図書館蔵)

バシル・アー (1657-1746) は、エチオピア出身の宦官としてメフメト 4 世のころから宮廷に仕え、アフメト 3 世、マフムト 1 世の時代には宮廷宦官長を勤めた。愛書家としても知られた人物であり、自らの名を冠した図書館を設立したことでも有名である [Hathaway 2005]。彼の蔵書コレクションの中にある、4 冊からなるこの稿本群は、複数の手で書写され、書写者にかんする具体的情報は残っていない。稿本 no. 455 には「1129 年ムハッラム月 (1716 年 12 月)」, no. 456 には「1130 年ラビーウ第 1 月 (1718 年 2 月)」との日付が記されている [Beşir Ağa 455: 2, fol. 482b; Beşir Ağa 456: 1, fol. 103a]。

### (3) Carullah 1588-1591 (スレイマニエ図書館蔵)

ジャールッター (1738 年没) は、イスタンブルやエディルネで法官として活躍した法学者である [Özcan 2013a]。彼の蔵書の中にも 4 冊の『真珠』稿本があり、そのうち稿本 no. 1591 写本には「1132 年シャッワール月/1720 年 8 月」との日付が記され、書写者の名前として Muḥammad Abū Ismā'il al-Urdunawī という人名が記されているが、この人物の詳細は不明である [Carullah 1591: fol. 849b]。

### (4) Ahmet 2912/1-4 (トプカプ宮殿図書館蔵)

アフメト 3 世のコレクションの中にも、4 巻からなる『真珠』稿本群があることがカタログから確認されるが、詳細は不明である。カタログによると、10/16 世紀に書写されたという [Karatay 1966: 399-400]。

これらのオスマン期『真珠』稿本は、いずれもアフメト3世治下の翻訳事業が開始された1725年よりも前に書写されており、とくにGülnüş稿本の書写年はアフメト3世の治世よりも先立つ。オスマン期においてアフメト3世以前から、『真珠』という作品への関心が存在していたことは疑いはないが、これら稿本の書写と、アフメト3世による翻訳事業は、どのような関係があったのだろうか。

## II TIEM 所蔵『真珠』稿本

### 1 TIEM のコレクションについて<sup>5)</sup>

TIEMの前身は、オスマン朝末期において、スレイマニエ複合施設内に設置されたイスラム・ワクフ博物館 (Evkaf-ı İslam Müzesi) である。1983年に現在の地、すなわちスレイマン1世 (在位1520-66年) の大宰相パルガル・イブラヒム・パシャ Pargalı İbrahim Paşa (d. 1536) の邸宅跡に移動して、現在にいたっている [Aksoy 1984]。

TIEMには多くのアラビア語稿本が所蔵されており、『真珠』稿本についても8点が所蔵されている。その収載内容と葉数などの情報は【表4】のとおりである。20世紀初頭にイスタンブールのアラビア語写本を調査したカーアンはそれらについて、「ワクフ博物館は8巻 (volumes) を所蔵し、それは4つの collections の部分をなす。いずれも著者の没後まもなく (書写されたもの) であり、文字はきわめて読みやすい」と述べている [Cahen 1936: 353-354; Şeşen 1997: 629-630]。ここでカーアンの分類に従い、4つのコレクションそれぞれの書写者を検討すると、以下のとおりである。

#### (A) No. 2155, 2156

No. 2155 末尾に書写者名と書写年月日が記されており、そこからイラーキー Muḥammad

【表4】 TIEM 所蔵本

	所蔵番号	巻	収載内容 (AH)	葉数/行数/サイズ	書写年月日
A	no. 2155	2		242/19/270×180	881.09.05/1476.12.22
	no. 2156	5	5-10	333/19/268×180	
B	no. 2157	16	708-724	273/23/268×176	893.12.16/1488.11.21
C	no. 2158	19	331-386	283/19/268×180	
D	no. 2159	22	481-521	314/19/272×188	
	no. 2160	25	579-591	218/19/268×180	
	no. 2161	26	591-621	420/19/270×180	
	no. 2162	37	799-813	303/19/270×180	

5) 筆者は2005年3月に実見調査を行い、その成果の一部は2009年日本オリエント学会第51回大会において「オスマン朝時代のアラビア語写本：トルコ・イスラム美術博物館 2155-2162 写本をめぐって」と題するポスター発表を行った。



b. Muḥammad b. Muḥammad al-ʿIrāqī なる人物が、881 年ラマダーン月 5 日土曜日（1476 年 12 月 22 日）に書写した稿本と分かる [TIEM 2155: fol. 242a]。同時代史料中でこの人物の伝記情報を確認することはできないものの、書写年代やその収載内容からすると、この 2 冊が上記の 2 分冊稿本群に含まれるものであることが分かる。なお、これまで書写者不明であった Ahmet 2911/C1 稿本と筆跡や体裁が酷似しており、これらは同一の書写者によるものと考えられる。

### (B) No. 2157

末尾に書写者名として Muḥammad b. Aḥmad b. Muḥammad al-Ikḥmīmī, 書写年月日として 893 年ズルヒッジャ月 16 日（1488 年 11 月 21 日）という文言が記されている [TIEM 2157: fol. 273b]。すなわち上述のイフミーミー書写本群の一部を構成するものであり、内容からは 19 巻本中の第 16 巻に相当すると判明する。

### (C) No. 2158

書写者、年代ともに不明であるが、カーアンは著者没後まもなく書写された稿本と記している。これがマムルーク朝時代に書写されたものであるとすれば、その収載内容から、2 分冊本稿本群の一部であると考えられる。

### (D) No. 2159-2162

書写者名等の情報が一切記されていないが、筆跡や体裁から判断すると、Veliyyüddin 2394 稿本の書写者、すなわちアズハリーの筆になるものと分かる。

このように、これら TIEM 所蔵本はさまざまな書写者の筆になるものではあるが、いずれもマムルーク朝期に書写された稿本であると考えられる。8 冊のうち 1 冊は、全 19 巻本のイフミーミー書写本であるが、残りの 7 冊は「2 分冊稿本」に該当する。

## 2 TIEM 所蔵本の来歴——奥書に書かれた情報から

これらの TIEM 所蔵本のうち、No. 2155 には、そのタイトルページの前に 3 葉（6 ページ）にわたるアラビア語による奥書が付されており、これら 8 冊の『真珠』稿本の来歴と、アフメト 3 世による『真珠』翻訳事業の説明、および、8 冊それぞれの収載内容が記されている [TIEM 2155: fols. ib-iva]。奥書中に、「先の書記長官 (raʿīs al-kuttāb al-sābiq)」ムスタファー・エフェンディー al-Ḥājj Muṣṭafā Afandī という名前と、1161 年 2 月 5 日/1748 年 2 月 4 日に記されたとの記述がある。この奥書は、イラーキーによって書写された『真珠』本文とは明らかに異なる筆跡で書かれており、これらの稿本がどのようにして一つのコレクションとしてまとめられ保管されるかにいたったかを正確に伝えていると考えられる。

以下にこの奥書の内容を紹介するが、その文章は押韻の形式を持つ散文、すなわちサジュ

ウ (saju') の体裁を取っており、また修辞に満ちた表現となっているため、すべてを逐語訳することは有益ではないだろう。ここでは奥書のおおよその内容を要約して示すこととする。

1. これらはアイニー『真珠の首飾り』の書、全 30 数巻 (qīṭa') のうちの 8 巻であり、エディルネにあるサリーム・ブン・スライマーン (セリム 2 世、在位 1566-74 年) の書庫 (kutubiyah) にワクフとして設定されたものである。これらはアフメト 3 世治下の 1140(1727)年の終わりまで、そこに保管されていた [fol. ib, ll. 3-6]。
2. アフメト 3 世は、『真珠の首飾り』をトルコ語に翻訳することを大宰相イブラヒム・パシャに任じ、[先述の 30 数巻本とは別の] 大部の 4 巻 (mujallad) からなるその歴史書を与えた。イブラヒムはそれを、彼のもとにいる翻訳の適正のある者たちに分配した。この 4 巻本は、1130(1717)年までエディルネに住んでいたシャイフ・ユースフなる者が書写したものである。ところがこの書写本には「1 行たりとも誤りから自由なものではなく、抜け落ちのないものはなかった」ため、書記たちには翻訳することができなかった [fol. ib, l. 7-fol. iia, l. 2]。
3. その頃、エディルネの法官アフマド・ムイードが、エディルネのセリミエ書庫に 30 数巻 (qīṭa') からなる『真珠』が存在すると報告した。それは先述の者 (シャイフ・ユースフ) が書き写した原本であった。[イブラヒムは] 翻訳に正確を期するため、その 30 数巻からなる書を「コンスタンティノーブル (イスタンブル)」に取り寄せ、翻訳者たちに分配した。その原本は、著者の自筆本を含む、さまざまな人びとの筆になり、誤りが入り交じっていた [fol. iia, ll. 3-15]。
4. こうして翻訳は完成したが、彼ら (翻訳者たち) に書物を持ち帰ることを許していたため、窃盗が起り、散逸してしまった。マフムト 1 世 (在位 1730-54 年) 治下の 1160 (1748)年、私はムルタダー・エフェンディー (al-Hājj Murtaḍā Afandī al-'Awir) という人物の遺産台帳の中に、先述の書物のうち 8 巻を見つけた。それらは「スルタン・セリムのトゥグラー (花押) の印を押され、ワクフし [神の] 道に供するとの印があり、納税支払いを免除されていた」。私はそれらが [正当な] 所有物ではなく盗品であることを知り、それらを自宅へと持ち帰った [fol. iib, l. 8-fol. iia, l. 2]。

これ以降は、これら 8 巻本の取載内容についての情報になるため省略する。

この奥書に書かれている内容を時系列にまとめれば、以下のようになる。

- ・ 1130/1717 年以前 エディルネのシャイフ・ユースフが『真珠』の 4 巻本を書写する。
- ・ (1725 年) アフメト 3 世が大宰相イブラヒム・パシャに『真珠』の翻訳を命じ、シャイフ・ユースフの 4 巻本を与える。
- ・ 1140/1727 年 エディルネのセリミエ書庫から『真珠』の 30 数巻本を取り寄せる。
- ・ 翻訳は完成するが、『真珠』30 数巻本は散逸する。
- ・ 1160/1748 年 奥書の書き手であるムスタファー・エフェンディーが、ムルタダー・エ

フェンディーの遺産の中から『真珠』30数巻本のうちの8冊を見つける。

この奥書に登場する『真珠』の稿本群は、シャイフ・ユースフによる4巻本と、セリミエ書庫から招来された30数巻本の2種類である。前者についてはその後どのようなかかは記されていないが、大部の4巻本という特徴からは、先に見た、オスマン朝期に書写された『真珠』稿本群との共通性が見て取れる。当初からアフメト3世の蔵書であったことを考えれば、現在アフメト3世コレクションの中にある2912番稿本の4巻本がそれである可能性が高いだろう。

一方、後者については現在TIEMが所蔵する8冊以外にも20冊以上の稿本が存在したはずであるが、それらの行方は分からない。「30数巻本」という冊数からは、これらが「2分冊稿本」群の全体に相当するとも推測される。しかし、奥書ではこれらの中にはアイニーの自筆本が含まれていたとあり、また実際に現存するTIEM所蔵本には「19巻本」を構成するイフミーミー書写本も含まれている。それゆえ、この30数巻本はさまざまな稿本群からの寄せ集めのコレクションであったと考えるべきであろう。

また、シャイフ・ユースフ4巻本にせよ、セリミエ所蔵の30数巻本にせよ、どちらもエディルネから取り寄せられているという点にも注意を要する。この奥書が書き足されたのはイスタンブルにおいてであり、当然ながらアフメト3世治下の『真珠』翻訳事業もイスタンブルにおいて行われたことは間違いがないだろう。しかし、それ以前の段階では実に多くの『真珠』稿本がエディルネに存在したことがうかがえるのである。アラビア語稿本受容の歴史におけるエディルネの重要性については、次章で再び触れることとする。

それでは、そもそもセリミエ書庫が所蔵していた30数巻本とは、どのような稿本群だったのであろうか。

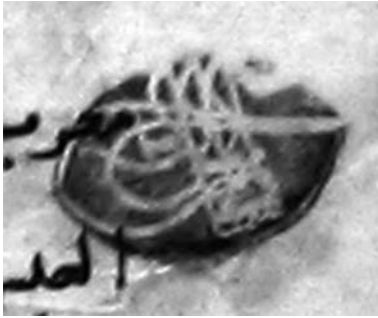
### Ⅲ オスマン朝期『真珠』稿本コレクションの復元

#### 1 旧セリミエ所蔵本

TIEM 稿本の奥書には、セリミエ所蔵本にはいずれもセリム2世のトゥグラーの印があったと書かれていた。トゥグラーとは、元来はオスマン朝君主による自筆のサインのことを意味するが、オスマン期においてはトゥグラーの意匠を彫り込んだ印章を蔵書に捺印し、それがその人物の所有する書物、あるいはその人物がワクフ財として寄進・管理している書物を示していたことが知られている [Sayyid 1997: 1, 246-257]。トゥグラーを印章として蔵書に捺印する慣行は、バヤジト2世の時代から始まったとされる [Déroche 2006: 336-337]。

TIEM が所蔵する『真珠』稿本を見てみると、no. 2155, 2157, 2159, 2160 の4点には、そのタイトルページの裏面か最終ページ、あるいはその両方に、アーモンド型の枠の中に文字が彫り込まれた印が捺印されている。これらの稿本に押されているのはこの印のみであるため、これがセリム2世のトゥグラーであるとみてよいだろう。ただし仔細に観察すると、

No. 2159 の印は他の3つに比べると丸みを帯びた形状をしており、これらの印は実際には形が異なる2種類の印であることが分かる。しかし枠内に書かれた文面は変わりがなく、どちらも等しくセリム2世の蔵書であることを示していると考えられる<sup>6)</sup>。



【図1：TIEM 2155】



【図2：TIEM 2159】

一方、TIEM 稿本のうちセリムの蔵書印が無い4冊には、タイトルページの裏面か最終ページのどちらかに、印とほぼ同じ大きさの削り跡が確認できる。これらは元々はセリムの蔵書印が押されていたものが、ある時点で削り取られたものと推測される。おそらくは、奥付の記述に照らして考えるならば、これらの稿本が盗品として流通した際に所蔵を示す印が削り取られたものと推測しうが、詳細は不明である。

さて、すでに知られている『真珠』稿本の中には、このセリム2世のトゥグラールとおぼしき印を持つものがいくつか見つかる。その稿本とは【表5】のとおりである。これらの印がセリミエ書庫の蔵書であったことを示すものであるならば、【表5】にあげた稿本が、上述の奥書で述べられていた、30数巻本からなるセリミエ所蔵本の一部にあたることになる。

これらの多くが Veliyyüddin コレクションに加えられていることに注目したい。そもそもこのコレクションは、イスラーム長老 (Şeihülislam) 職にあった Veliyyüddin Efendi (1768年没) が自らの蔵書をアーティフ図書館 (Atif Efendi Kütüphanesi) に寄贈し、その後現在あるバヤズイト図書館に移管されたという歴史をたどっている [İhsanoğlu 1995: 23; Özcan 2013b]。また、これらの稿本すべてには「イスラーム長老ワリーユッディーン・エフェンディーが1175(1761-1762)年にワクフとした (waqafa shaykh al-Islām Waliy al-dīn Afandi al-marḥūm al-ḥājj Muṣṭafā Āghā ibn al-marḥūm al-ḥājj Ḥusayn Āghā sanat 1175)」との文言の彫り込まれた印が押されている。つまり、Veliyyüddin コレクションは上述の TIEM 所

6) セリム2世のトゥグラールは、Salīm Shāh bn Sulaymān Shāh Khān al-Muẓaffar ḡā'imān という文面である。www.tugra.org 参照。なお、Atbaş 2019: 211 には、バヤジト2世が王子時代と君主位に就いた後とで2種類のトゥグラール印を使い分けていた事例が示されている。

【表5】 セリム2世のトゥグラーを持つ稿本

	アーモンド型 トゥグラー	丸みを帯びた トゥグラー	削り跡のみ
TIEM 2155	○		
TIEM 2156			○
TIEM 2157	○		
TIEM 2158			○
TIEM 2159		○	
TIEM 2160	○		
TIEM 2161			○
TIEM 2162			○
Veliyyüddin 2390	○		
Veliyyüddin 2392		○	
Veliyyüddin 2393		○	
Veliyyüddin 2394		○	
Veliyyüddin 2396		○	
Süleymaniye 835	○		
Esad 2317	○		

蔵本がムスタファー・エフェンディーによって発見され確保されたよりも後に寄贈されており、この発見より後に見つけ出されたものとの可能性がある。

また、セリミエの印が押された稿本には Süleymaniye コレクションに加えられているものもある。スレイマニエ図書館自体は 1557 年に完成しているが、そこに収められた Süleymaniye コレクションは、マフムート 1 世（在位 1730-54 年）と大宰相 Köse Mustafa Bahir Paşa の頃に集められたものである [İhsanoğlu 1995: 24]。こちらの場合、上述のムスタファー・エフェンディーによる発見以前に見つけ出されていたものと考えられる。

このように、現存する『真珠』稿本に押されたトゥグラー印を検証することによって、それがかつてセリミエに収蔵されていた『真珠』稿本群であるか否かを判断することが出来る。残念ながら筆者は、マムルーク朝期に関連する巻、すなわち第 14 巻以降を中心に史料調査を行ってきたため、それ以前の巻については未検討の部分が多い。しかし今後のさらなる調査によって、旧セリミエ所蔵本を復元することは可能であると考えている。

## 2 オスマン朝期稿本群

今回は、アフメト 3 世期の翻訳事業で当初底本とされた 4 巻本とおぼしい、Ahmet 2912 稿本群について検討することはできなかった。この稿本群は、セリミエに所蔵されていた 30 数巻本を原本としているとあるが、いつどのように作成されたものかは分からない。しかし、これと同様に大部の 4 巻からなるコレクションが、Gülnüş, Beşir Ağa, Carullah に所蔵されており、それらはアフメトの翻訳事業以前にすでに完成していた。これらの稿本群と、旧セリミエ所蔵本との記述内容を比較することで、オスマン朝期の書写本がどのように成立したかを考えてみたい。ただしここでは、それぞれの稿本群の第 4 巻に相当する部分

【表6】『真珠』オスマン朝期稿本とその底本との関係

巻	Gülnüş 64		Beşir Ağa 457		Carullah 1591	
	葉数	想定される底本	葉数	想定される底本	葉数	想定される底本
14	1a-208b	Veliyyüddin 2391	1/1a-227b	Veliyyüddin 2391	1a-204a	Veliyyüddin 2391
15					205a-375a	Veliyyüddin 2392
16	209b-278b	Veliyyüddin 2393	1/228b-308b	Veliyyüddin 2393	376b-525b	TIEM 2157
	279b-348b	Veliyyüddin 2394	1/309b-389a	Veliyyüddin 2394		
17	373b-442a	Süleymaniye 835	2/1a-67a	Süleymaniye 835	526a-612b	不明
18						
19	444a-630b	Veliyyüddin 2396	2/68b-	Veliyyüddin 2396	613a-	Veliyyüddin 2396

のみを取り上げることとする。各稿本の各部ごとの葉数と、それぞれの底本であったと想定される稿本を【表6】にまとめた。

### (1) Gülnüş 64

Gülnüş 稿本群の4巻目にあたり、ヒジュラ暦で621年以降の内容を収載しているが、その中身はさらに細かく5つの部に分かれている。第1部は621年から688年の内容を含み、その奥書には、822年ラビーウ第2月24日(1419年5月28日)に執筆された自筆本から、895年ジュマダー第1月7日(1490年3月29日)にムハンマド・ブン・アフマド・ブン・ムハンマド・アンサーリー、すなわちイフミーミーが書写し終えたと書かれている[Gülnüş 64: fol. 208b]。当然これは、Gülnüş 稿本の書写者が基にした稿本に書かれていた文面をそのまま引き写したものであるが、その文面はVeliyyüddin 2391 稿本と一致する[Iqd/Amīn: 393-394]。この第1部はVeliyyüddin 2391の子写本、あるいは孫写本であると言えよう。

第1部の末尾にはトルコ語で「689から707まで元の写本から欠落している」との一文が記されている。この稿本を書写した際に、底本とすべき稿本が見つからなかったことを示している。

第2部、第3部、第4部は、それぞれ奥書がないが、それぞれの収載内容は、「2分冊稿本群」に属するVeliyyüddin 2393, Veliyyüddin 2394, Süleymaniye 835と一致する。

第4部の末尾にはトルコ語で「上述年から799年まで元の写本で欠落」と記されている。

第5部は799年から850年までの内容を含み、末尾の奥書には、自筆本から893年ジュマダー第1月19日(1488年5月31日)にイフミーミーが書写したとの記述がある。これも第1部と同様、元の稿本にあった文面をそのまま引き写したものであり、その文面はVeliyyüddin 2396 稿本と一致している[Gülnüş 64: fol. 630b; Veliyyüddin 2396: fol. 387a]

### (2) Beşir Ağa 457

Beşir Ağa 稿本群の4巻目にあたるno. 457は、389葉目を越えたところでページ番号が改

まっているため、Part 1, Part 2 として区別する。Part 1 はさらに 3 部に、Part 2 は 2 部に分かれ、計 5 部が含まれていることになるが、その内容は上記 Gülnüş 64 とほぼ同様であるため、詳しい説明は省略する。

### (3) Carullah 1591

Carullah 稿本群の 4 巻目にあたる no. 1591 は、カバーする年代は 621 年から 850 年と上記の 2 稿本と同様ではあるが、その中身は 5 つの部に分かれており、さらに収載内容を仔細にみると上記 2 稿本とは大きく異なる点がある。

第 1 部は、末尾の奥書にイフミーミーによる書き込みがそのまま写されており、上記 2 稿本と同様に Veliyyüddin 2391 の子写本、あるいは孫写本であることが見て取れる [Carullah 1591: fol. 204a]。

第 2 部には奥書は無いが、689 年から 707 年の内容を含んでおり、自筆本である Veliyyüddin 2392 の子写本、あるいは孫写本であると考えられる。

第 3 部は 708 年から 724 年の内容を含み、末尾の奥書には 893 年ズルヒッジャ月 16 日 (1488 年 11 月 21 日) にイフミーミーが書写したと記されている。これは TIEM 2157 稿本の奥書と一致している [Carullah 1591: fol. 525b; TIEM 2157: fol. 273b]。

第 4 部は、725 年から 798 年の内容をカバーしているものの、その文章は『真珠』本文と比べて情報量が少なく、おそらくは他の歴史書からの書写であると思われる。現時点では Süleymaniye 830 の文章との共通点が多いため、アイニーの別著作である『満月の歴史 (Tarih al-badr fi awşaf ahl al-‘aşr)』からの書写と考えているが、相違点も多く確定はできない。

第 5 部は、上記 2 稿本と同様、Veliyyüddin 2396 稿本と一致している。

### 3 オスマン朝期稿本群はどのように作られたか

以上のように、3 稿本それぞれがさまざまな稿本を底本として『真珠』を複製しようとした様子がうかがえる。時に、底本がないために省略している箇所や、『真珠』以外の別の歴史書を代用として使っている箇所もあり、複製としては必ずしも完全ではないことも分かる。これらの底本と想定される稿本を見ると、ほぼすべてが前述の【表 5】にあるセリム 2 世のトゥグラーを持つ稿本であることが見て取れる<sup>7)</sup>。

オスマン朝期 3 稿本の製作年代からすれば、これらはみなエディルネのセリミエに所蔵されていた稿本を底本として作られた可能性が高いだろう。むしろ 3 稿本がこれらの底本から直接ではなく、間接的に参照して書写された可能性はあるが、これら 3 稿本の書写者たち

7) ただし Veliyyüddin 2391 については筆者は実見しておらず、それがセリムのトゥグラーを持つか否かは未確認である。

にとって、参照しうる最良の写本が当時セリミエにあったことは確実である。

このことは、アフメト3世即位以前のオスマン朝の宮廷が、イスタンブルではなくエディルネに置かれていた事実と照らしてみれば、驚くにはあたらない。アフメト3世の父メフメト4世はその治世のほとんどをエディルネで過ごし、この間、官僚機構やハレムの組織までもが、イスタンブルではなくエディルネに置かれていた。宮廷がエディルネにあるという状態は、アフメトの兄ムスタファ2世が1703年のエディルネ事件で廃位させられるまで続いた [林 2008: 276-284; 小笠原 2018: 189-199]。こうした状況下で、メフメト4世の後、ムスタファ2世の母后として、エディルネの宮廷において力を持っていたギュルヌシュ・スルタンにとっては、エディルネのセリミエ書庫が所蔵していた稿本を自由に渉猟して稿本を書写させることは大いに可能であったと考えられる。

また、【表7】では逆に、現存するマムルーク朝期稿本のうち、ヒジュラ暦621年以降の内容を収載するものを、巻数ごと、バージョンごとに並べ、それぞれの右の列に Gülnüş, Beşir Ağa, Carullah のうちそこから書写されたものを G, B, C の頭文字で記した。このようにすると、オスマン朝期3稿本が決して直接の底本とはしなかった稿本があることが分かる。その稿本とは、著者自筆本の第17巻、第19巻にあたる Ahmet コレクションの 2911/A17 と A19、および、2分冊稿本の第34巻にあたる Ahmet コレクションの 2911/C34 である<sup>8)</sup>。オスマン朝期3稿本は、これらの該当箇所については省略したり、イフミーミー書写本からの書写で補ったりしていたことが分かるだろう。

アフメト・コレクションの『真珠』稿本が参照されなかったのは、それらが当時の書写者には知られていなかったか、あるいは書写者にはアクセスの出来ない場所に所蔵されていたためであろう。アフメト・コレクションを構成する稿本にはいずれもアフメト3世のトゥグラ印が押されているが、Ahmet 2911/A17 と A19 には、それ以外のいかなる印も押され

【表7】『真珠』マムルーク朝期稿本とその子写本との関係

巻	自筆本	イフミーミー書写本	2分冊稿本
14		Veliyyüddin 2391   G B C	
15	Veliyyüddin 2392   C		
16		TIEM 2157   C	Veliyyüddin 2393   G B
			Veliyyüddin 2394   G B
17	Ahmet 2911/A17		Süleymaniye 835   G B
			Ahmet 2911/C34
18			
19	Ahmet 2911/A19	Veliyyüddin 2396   G B C	TIEM 2162

8) 3稿本すべてがより情報量の多い Veliyyüddin 2396 を参照しているため、TIEM 2162 については除外することができる。



ていない。このことから考えると、アフメト3世期には、エディルネの宮廷にいた知識人たちには知られていなかった新たな『真珠』稿本が発見され、アフメト・コレクションに加えられたのであろう。

## む す び

本稿の分析の結果として、オスマン朝による『真珠』稿本の受容は以下のような流れで進んだと言えるだろう。

確認できる限りにおいて、オスマン朝スルタンの中で『真珠』稿本を最初に見いだしたのはセリム2世であった。彼は、30数巻からなる『真珠』稿本を、エディルネに建設したセリミエ書庫に、ワクフ財として収蔵したのである。このセリミエ所蔵本は、一部アイニーの自筆本も含んではいたものの、さまざまな書写者による稿本の寄せ集めであった。

その後17世紀末頃から、オスマン朝宮廷において『真珠』への関心が高まり、書写や翻訳がなされるようになった。17世紀後半から18世紀初頭まで、オスマン朝スルタンの居所はエディルネに置かれていたため、『真珠』の書写本や翻訳本の製作もエディルネにおいて、セリミエ収蔵本を基にして行われていた。こうして製作された書写本が、現在はGülnüş, Beşir Ağa, Carullah, そしておそらくはAhmet 2912に所蔵されている4巻本稿本である。

再びイスタンブルに居所を戻したアフメト3世の治世では、本格的な『真珠』の翻訳事業が開始され、それまでエディルネに置かれていたさまざまな『真珠』稿本がイスタンブルに置かれるようになった。セリミエ所蔵本はこの時期にエディルネから取り寄せられたが、それらは翻訳者の閲覧に供されるうちに散逸し、現在ではTIEM, Veliyyüddinなどの異なる稿本コレクションに分け持たれるようになっている。ただし、アフメト3世はその治世において、アイニー自筆稿本が大半を占める『真珠』稿本群を入手し、ワクフ財として自らの書庫に加えてもいた(Ahmet 2911/A)。

このような『真珠』受容の流れの中で、目を引くのはエディルネ宮廷という場の重要性である。そもそもセリム2世によってエディルネに『真珠』稿本が置かれるようになったのは偶然であったが、そのことが後に、メフメト4世によるエディルネへの宮廷移転を機に、宮廷人士の間で『真珠』という作品が再発見され、多くの稿本が書写されるきっかけを作ったと言えるだろう。上に見たとおり、バービンガーに代表されるこれまでの研究では、『真珠』受容についてはアフメト3世および大宰相ネヴシェヒルリ・ダーマード・イブラヒム・パシャの主導権に注目されてきたが、彼らの翻訳事業以前に宮廷で力を持っていた、母后ギュルヌシュや宦官長ベシル・アーの果たした役割について、今後さらに検証されるべきであろう。

一方、アフメト3世の翻訳事業を含む文化振興については、必ずしも肯定的な評価を下しうる側面ばかりではなかった。彼の命令で、多くの『真珠』稿本がイスタンブルに集められ

たが、その過程で紛失しかけた稿本もあったのである。さらに、アフメト3世はそれまで知られていなかったアイニーの自筆本を見いだして自らのコレクションに加えたという功績も挙げられるが、それらは宮廷士の閲覧にどれだけ供されたのであろうか。少なくともTIEM 稿本に付されたムスタファー・エフェンディーによる奥書には、アフメト・コレクション中の自筆本群については言及がない。つまり、アフメト3世の『真珠』翻訳事業においては、新たに見いだされた自筆本群は一切用いられなかった可能性がある。

さて、本稿ではオスマン朝において『真珠』稿本がどのように受容されたかを説明したが、そもそも『真珠』稿本がカイロからどのように持ち去られたかについては明らかになっていない。一般には、1517年のセリム1世のエジプト征服により多くの文物がカイロから持ち去られたと考えられるが、セリミエ所蔵本のワクフ設定はセリム2世の在位中、ないしは彼が王子であった期間に行われたはずである。エジプト征服からセリム2世即位までのおよそ50年の間、『真珠』稿本はどこにあったのだろうか。同様に、アフメト3世によるAhmet 2911/A シリーズのワクフ設定は、エジプト征服から200年近く経過した彼の在位中に行われたはずである。その間、自筆本を含む極めて価値の高い稿本群は、どこにあったのだろうか。

セリム1世がマムルーク朝、およびサファヴィー朝から戦利品として獲得した書物は、トプカプの内廷(Enderun)に留め置かれ、その後、息子のスレイマン1世の時代に目録が作られたという[Atbaş 2019: 161-162]。セリム2世は、祖父によってカイロからもたらされ、父によって目録化された内廷の書物群の中から自らの取り分を選び取り、エディルネの自らの書庫に運ばせたのであろう。しかしここで、すべての『真珠』稿本がセリム1世によって一度にカイロから持ち出され、内廷に置かれていたと仮定すると、セリム2世は貴重な自筆稿本は除外して、あえて雑多な寄せ集めを選んで自らの書庫に移したことになる。セリミエ所蔵本が当時トプカプにあった『真珠』稿本のすべてであったと考える方が自然であろう。

それではアフメト3世コレクションに加えられた稿本群はどこに置かれていたのだろうか。アフメト・コレクションを構成するアイニー自筆本は、それぞれの稿本の冒頭に記されたワクフ設定文から、マムルーク朝期にはカイロのバドリーヤ学院内にワクフ財として置かれていたことが明らかである。これらのワクフ財は、セリム1世の征服時にも収奪を免れてその後もカイロに置かれ続け、アフメト3世期に再発見されてトプカプの彼のコレクションに加えられたのではないだろうか。

以上、推論を重ねる形となったが、現在手元にある証拠から、『真珠』稿本がオスマン朝にどのように流入し受容されたかを再構成した。マムルーク朝期に生まれた豊かな書物の文化は、マムルーク朝滅亡後、段階的にオスマン朝宮廷に運ばれ、時間をかけて受容されていったのである。

[謝辞] 本研究は、JSPS 科研費基盤研究 (C) 「アラビア語歴史文献学の新天地：マムルーク朝年代記の校訂とデジタル化」JP20K01011 の助成を受けたものです。

## 文献表

- Ahmet : Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi MS Ahmet III.  
 Beşir Ağa : Süleymaniye Kütüphanesi MS Beşir Ağa.  
 Carullah : Süleymaniye Kütüphanesi MS Carullah.  
 Es'ad : Süleymaniye Kütüphanesi MS Es'ad Effendi.  
 Gülnüş Valide Sultan : Süleymaniye Kütüphanesi MS Gülnüş Valide Sultan.  
 IA : *İslâm Ansiklopedisi*, Türkiye Diyanet Vakfı İslâm Ansiklopedisi Genel Müdürlüğü eds., 44 vols., Istanbul, 1988-2016  
*'Iqd/Amîn* : Al-'Aynî *'Iqd al-jumân fi târih ahl al-zamân*, Muḥammad Muḥammad Amin ed., 5 vols., Cairo, 1987-2009.  
*'Iqd/Rizq* : Al-'Aynî *'Iqd al-jumân fi târih ahl al-zamân*, Maḥmûd Rizq Maḥmûd ed., 4 vols., Cairo, 2002-2010.  
 Küçükçelebizâde, *Tarih-i İsmâ'il 'Asim Efendi*, in *Tarih-i Raşid*, vol. 6, Istanbul, 1865-1867.  
 Süleymaniye : Süleymaniye Kütüphanesi MS Süleymaniye.  
 TIEM : Türk ve İslam Eserleri Müzesi MS.  
 Veliyyüddin : Beyazıt Devlet Kütüphanesi MS Veliyyüddin.
- Aksoy, Şule (1984) La bibliothèque du musée des arts turcs et islamiques. *Travaux et recherches en Turquie* II, Paris-Louvain.  
 Artan, T. (2006) Arts and architecture. In: S. Faroqhi (ed.) *The Cambridge history of Turkey*. Cambridge : Cambridge University Press, 408-480.  
 Atbaş, Zeynep (2019) Artistic aspects of Sultan Bayezid II's book treasury collection : Extant volumes preserved at the Topkapi Palace Museum Library. In: Gülru Necipoğlu, Cemal Kafadar, and Cornell H. Fleischer (eds.) *Treasures of Knowledge : An Inventory of the Ottoman Palace Library (1502/3-1503/4)* I-II. Leiden : Brill, 161-211.  
 Babinger, Franz (1927) *Die Geschichtsschreiber der Osmanen und ihre Werke*. Leipzig.  
 Brockelmann, Carl (1891-1949) *Geschichte der arabischen Literatur* I-V. Leiden.  
 Cahen, Claude (1936) Les chroniques arabes concernant la Syrie, l'Égypte et la Mésopotamie : de la conquête arabe à la conquête ottomane dans les bibliothèques d'Istanbul. *Revue des études islamiques* 10, 333-362.  
 Dār al-Kutub (1930) *Fihrist al-kutub al-'arabiyyah al-mawjūdah bi-dār al-kutub al-miṣriyyah* 5 (Fihrist al-ta'rih). Cairo.  
 Déroche, François (2006) *Islamic codicology : An introduction to the study of manuscripts in Arabic script*. Al-Furqan Islamic Heritage Foundation.  
 Eş, Emir (2010) *Catalogue of manuscripts in the Süleymaniye library* I-III. Malaysia : Saqifat al-safa

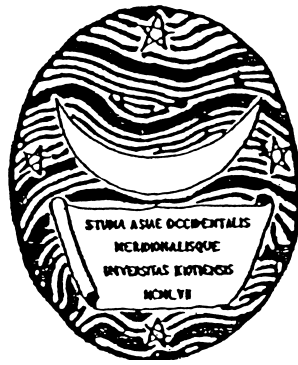
trust.

- Hathaway, Jane (2005) *Beshir Agha : Chief eunuch of the Ottoman imperial harem*. Oxford : Oneworld.
- 林佳世子 (2008) 『オスマン帝国 500 年の平和』 講談社.
- İhsanoğlu, Ekmeleddin ed. (1995) *Bibliography on manuscript libraries in Turkey and the publications on the manuscripts located in these libraries*. Istanbul.
- İpşirli, Mehmet (1996) Gülnüş Emetullah Sultan. IA 14, 248-249.
- Karatay, F. E. (1966) *Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi, Arapça Yazmalar Kataloğu* III. Istanbul.
- 中町信孝 (2004) 「バフリー・マムルーク朝時代史料としてのアイニーの年代記：ヒジュラ暦 728 年の記述を中心に」『オリエント』46(2), 134-160.
- 中町信孝 (2005) 「アイニーの 2 年代記の執筆手順とその史的価値：『イクド・アル=ジュマーン』第 17 巻前半部分の出典分析」『東洋学報』86(4), 031-063.
- 中町信孝 (2006) 「アイニーに帰せられた 4 年代記の成立年代と執筆意図」『西南アジア研究』65, 41-55.
- Nakamachi, Nobutaka. (2021) A Historiographical Analysis of the Four Chronicles Attributed to Badr al-din al-'Ayni. In : Stephan Cornemann and Toru Miura (eds.) *Studies on the History and Culture of the Mamluk Sultanate (1250-1517)*. Bonn : Bonn University Press, 113-138.
- Necipoglu, Gülru et al. (2019) *Treasures of Knowledge : An Inventory of the Ottoman Palace Library (1502/3-1503/4)* I-II. Leiden : Brill.
- 小笠原弘幸 (2004) 「オスマン朝修史官の叙法」『日本中東学会年報』20(1), 121-149.
- 小笠原弘幸 (2018) 『オスマン帝国—— 繁栄と衰亡の 600 年史』 中央公論新社.
- Özcan, Tahsin (2013a) Veliyyüddin Cârullah. IA 43, 38-40.
- Özcan, Tahsin (2013b) Veliyyüddin Effendi. IA 43, 40-42.
- Rogers, J. M. (1986) *The Topkapı Saray Museum : The Albums and illustrated manuscripts*, Filiz Çağman and Zeren Tanındı (original Turkish). Boston : Thames and Hudson.
- Sayyid, Ayman Fu'ād (1997) *Al-Kitāb al-'arabi al-makhtūṭāt* I-II. Cairo.
- Şeşen, Ramazan (1997) *Mukhtārāt min al-makhtūṭāt al-'arabiyya al-nādira fi maktabāt Turkiyā*. Istanbul.
- www.tugra.org (最終確認日 2021 年 8 月 14 日)

西南アジア研究

No. 93

2021



西南アジア研究会

# 目 次

## 論 文

- スンナ派イスラーム法学における既判力論争の展開  
—— マムルーク朝期を中心に —— …………… 堀 井 聡 江 ( 1 )
- オスマン朝時代におけるアラビア語稿本の受容  
—— トルコ・イスラム美術博物館所蔵『真珠の首飾り』  
稿本群の分析から —— …………… 中 町 信 孝 ( 24 )
- ヒッタイト語における不規則な3人称複数過去語尾 -ar…………… 吉 田 和 彦 ( 44 )

## 彙 報

- 『西南アジア研究』投稿規程…………… ( 68 )